

「北山三尾」余録

——高僧伝説と善妙尼寺——

成田俊治

高雄口から鳴滝をすぎ、周山街道を高雄・榎尾に向つて歩を進めると、次第に両側に山がせまり北山杉の木立が続く。御経坂を越え清滝川の清流ぞいにさかのぼれば高雄（尾）、榎尾、榎尾のいわゆる三尾にいたる。三尾の地は多くの楓樹があり、清滝川の溪流を埋める紅葉の鮮やかさは天下の絶景とうたわれ、今なお林間に紅葉をやり酒をくむ人は多い。

三尾にはそれぞれ神護寺、西明寺、高山寺と大寺名刹が薨をつらねているのをはじめ、街道の左右に時には杉木立の間に、あるいは曲りくねった街道の下に小

さな寺をみることができる。

三尾を含め梅ヶ畑にはなんと寺の多いことか。平岡八幡をすぎ平岡地区に入れば、左手山すそに往生院・導故院・福泉寺とならび、広芝地区には真休寺、善妙寺地区には為因寺、中島には慰称寺、一の瀬には導行寺と七ヶ寺を数えることができる。その他、もと寺院で自性寺といった平岡惣堂、僅かばかりの遺構をのこす一の瀬の石雲庵、そして既に廃絶し地名としてのみ残る善妙寺、大中庵。その他故身庵、即覚庵、神宮寺、外畑歓喜寺、鵜原寺など有名・無名の寺で、がこの地にならび建っていたのである。

さて、神護寺をはじめとする高山寺、西明寺という日本文化史上に於て著名な寺院が、高僧に帰依した朝廷や貴族の外護のもとに成立し、それらと密接な関係をもつことによつて栄え、七堂伽藍を整えていったのに対し、梅ヶ畑五集落の七ヶ寺は地下の宗教儀礼を担当し、それを通して地下の人びとと結びつき、寺としての機能を徐々にととのえていったのである。寺の結構も決して大きなものでなく、あたかも隠遁者の庵を思ふすものであった。時には栄え、時には衰え無住の時もあったであらう。また廃絶した寺の中には中世戦乱の戦死者の菩提を弔い、あるいは戒律の厳しい中で袈裟を縫い続けた正法律の尼僧たち。墓地や路傍に苔

むす石塔や墓石は、その歩んできた歴史を私達に語りかけている。

高雄の観楓そして神護寺・西明寺・高山寺、さらに和気家の人びとや明恵・文覚など、名刹、高僧、著名人については多くの名所図絵に描かれ、名勝志に取り上げられており、それらは北山三尾の華やかな一面ではあるが、歴史の中に埋没し忘れ去られてしまうような事柄もまた北山三尾の側面を物語っているのである。ではこれから、表面に出ていない北山三尾における高僧伝説を尋ね、廃寺となった善妙尼寺を尋ね歩くことにしよう。

ここに題して『北山三尾』余録。

周囲を山で囲まれ、細長い梅ヶ畑の村のほぼ中央に御経坂峠があり、これを境に南に平岡、広芝、善妙寺、北に中島、一の瀬の集落がある。その中島に天正年中に開創された浄土宗慰称寺がある。ここはもと、中島の地藏堂とも呼ばれ、今は別に光堂という堂に安置されているが、太秦広隆寺の埋木地藏を模したという右肌を脱いだ珍らしい姿の地藏菩薩を安置していた。

この寺に法然上人自筆という御影があり、梅ヶ畑への法然上人の来訪伝承がある。すなわち『円光大師二十五箇所案内記』（霊沢撰）に

「番外、梅ヶ畑中島村、慰樵庵、高雄山への道、鳴滝の西平岡ぜんめうじむらのとなり、寺は東向本尊阿弥陀如来、善導大師元祖大師、両大師の自筆くわぞうなり、天正年中筑後の善導寺一代、慰樵上人、夢つげありて此ところへはるくたづねきたりて、むめがはたの、みんな家へよりて、元祖大師の御じくはをえて、持参のせんだう大しのえぞう一所にあんちして、ここに一字をこんりうましまし、直にわが名をあんごうとなしぬ」とある。これによれば筑後善導寺より霊夢によって上洛した慰樵上人が、法然上人の御影を求めて、持参の善導大師の絵像とを安置して一字を建立したのがこの寺である。この慰樵庵は現在慰称寺としてそのあとを伝えているが、当寺に法然上人の御影一幅並に開山慰樵上人の画像一幅がある。そして御影の縁起をのべた『元祖大師縁起』（慶長十八年七月の奥あり）一軸が



足なかの御影

ある。この縁起によれば、建久四年五月中旬のころ、愛宕山月輪寺へ参詣された法然上人が、梅ヶ畑の中島という所を通ると、一人の但妄愚痴の老婆が身の孤独、不幸を歎き、はかない日々を送っているのに遇われた。そこで上人はたびたび立ち寄られ、念仏の安心・凡夫往生・弥陀の本願の有難さを説かれ、罪障多き女人も極楽に往生できることを説かれた。或る時、風雨激しく愛宕山月輪寺への山道が悪くなったところ、老婆は自分の履く「足なか」を上人に贈り、上人はそれを履かれ月輪寺へ向かわれた。それより後、上人は老婆への念仏勧化のため、雨中の時に衣を着し「足なか」をはいた姿を描かれ老婆に授けられた。老婆はこの御影を安置して念仏怠らず、遂に往生したという。そしてこの御影を上人五十二歳の「あしなかの御影」というところがいつの間にかその御影は所在不明となつてしまった。それから約四百年後、慰樵上人が清滝権現のお告げによつてこの御影を見出した、というのである。

の頃はまだ九条兼実との親交は始まっていないう時であるから、縁起をそのまま信することはできない。また慰樵上人は関東生実の大巖寺に二十数年間学び、のち筑後の善導寺に住したが、法然上人の御影を求めて上洛し西院村に居住していたところ、清滝権現の夢告によつて梅ヶ畑中島で所在不明であつた法然上人自筆の御影を見出し、そこで彼はこの地に草庵を結んで御影を朝夕供養したという。その草庵が慰称寺である。

以上のように梅ヶ畑における法然上人の女人教化を伝え、上人自筆の御影を伝えているが、このことが史実であるかどうかはともかくとして、兼実の月輪寺と上人との関係から、その月輪寺への往復路である梅ヶ畑における教化伝承が、真実味をおびて伝えられてきたのである。丁度、慰樵上人が上洛してきたという天正年間、そして『元祖大師縁起』の書かれた慶長年間、近世浄土宗寺院の成立期に當つており、浄土宗寺院として出発に際し、上人有縁の地として宗祖の御影が重視され、この御影を通して布教活動がなされたであらう。

梅ヶ畑平岡の西、山あいには導故上人を開創とする導故院がある。

導故上人とは桑普導故了のことで、近世初頭、浄

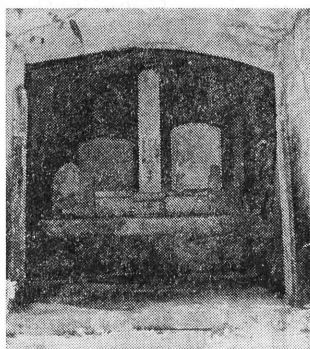
土宗教団の基礎を築いた江戸増上寺中興源誓存応（観智国師）の弟子で、廓山とともに浄土宗法度（元和条目）の草稿を作り、のち増上寺に住し徳川家康及び秀忠の帰依をうけた。元和二年（一六一六）黒谷金戒光明寺の住職となったが八年後に退き、この梅ヶ畑の地に隠棲して導故院を開いた。ところが一年後の寛永二年、幕府の命によって増上寺に住することとなった。

これより導故院は無住となり荒廃したのであるが、それから四、五十年の後、各地に仏教を弘め貧しい人びとを救済していた厭求上人という僧あり、この僧に教えをうけた京の富山某（伊勢国射和出身）は、厭求上人を招いて導故院を再興したのである。

厭求上人は京都で生れ江戸で学んだが、明暦三年（一六五七）江戸の大火にあい無常を感じて民衆教化のために地方行脚に出、山城・摂津・出羽・安芸・出雲など各地に念仏を弘めた。伝記によれば、天和元年（一六八一）の冬から翌年にかけて天災地変、飢饉起り、洛中洛外近里遠村餓死する者が続出し、また飢えて路に横たわる者多かった。厭求上人は導故院にあつてこれを見開し、京の町に出て自分の衣服を脱ぎ、日用の調度品をも米にかえて餓飢者に施し、また托鉢して貧しい人びとを救ったという。

本堂裏に高さ一・八メートル、横一・六メートル、

奥行四メートルの石窟があり、中には開山導故上人の名号石、中興厭求上人の名号石があり、その左右に檀越富山氏の墓がある。この石窟の中で念仏を唱えたという。この導故院の地について『厭求上人行状記』にいう、



導故院石窟

「此地のありさま緑樹蒼鬱として後山に覆ひ、脩竹瀟洒として前溪を囲み眼下に村里を見渡し風景絶勝なり（中略）人家を去こと遠からず右に五智山を見、左に仁和寺を望む、絶塵の佳境壺中の乾坤にして隠者の盤旋すべき処なり」と。

善妙寺の西北二丁ばかりのところ、に御経坂峠があり、そこには蓮華谷とよばれる地下の墓所がある。入口右側に六地藏の石仏とともに地藏堂があり、その前に六

十六部の墓がある。六十六部は六部ともいい、全国六十六ヶ国の著名な霊場に書写した『法華経』を一部ずつ奉納して歩く巡礼僧のことである。鎌倉時代には既に行われており、南北朝時代には六部の建てた板碑などもみることができる。江戸時代には浮浪人や乞食や盗賊などもまじっていたというが、ここ蓮華谷にある墓碑からうかがわれる六部は、徳の高い立派な僧であったらしい。すなわち墓碑銘によれば、生国は石見国浜田中郡、俗名西村九左衛門、法名覺普一幽大徳という。享保八年（一七二三）八月六日、六十二歳でこの地で往生したという。墓碑銘にいう、

「如心仏亦忝 如仏衆生然 心仏及衆生 是三無差別 諸仏悉了知 一切従心転 若能如是解 彼人見真仏 心亦非是身 身亦非是心 作一切仏事自在未曾有 若人欲了知 三世一切仏 应当如是観 心造諸如来」と。

ところで、この六部を葬った塚に霊験ありとして京内外の人びとが参詣したことを江戸中期の見聞記にのせている。すなわち『月堂見聞集』に

「北山梅ヶ畑の土民墓処の内に、六十六部の塚あり、是は十年已前に六十六部の僧此処にて病死す、所の者此の処に埋め置けり、然るに当（享保十七年）六月初かたより、京都其外参詣の者夥し、所

の土民の云、或夜此在所の者夢想あり、我を信心せば諸病癒すべしと、依之拜し祈るに、盲目は目を開き、蹇は能く歩むと云々、依之伝聞て参詣す、墓処に卒都婆立たる計也、祈願の者は櫛を立て、かわらけに水を入れて備へ、拜し終りて其の水を香水と名付け、竹の筒に入歸りて病人に頂戴せしむ、其の辺の土民、時を得て櫛かわらけ竹の筒を捨て売る、大かた城南神の香水のはやりしに似たり」

と伝えている。

享保八年に六部が世を去つてより十年、在所の者に霊験ありとする夢想があり、それ以後、病氣平癒の霊験あらたかであるという噂が広まり、京の町から多くの人びとがこの蓮華谷の六部の塚へ参詣して疾病平癒を祈り、また在所の人びとが参詣人を相手に商いをしたというが、その状況が目には浮ぶようである。

今はただ後に建てられた墓碑が、昔日の参詣のにぎわいも忘れ、時折、地下の人びとがお供えする線香のけむりの中に何事もなかった如く立っているのみである。

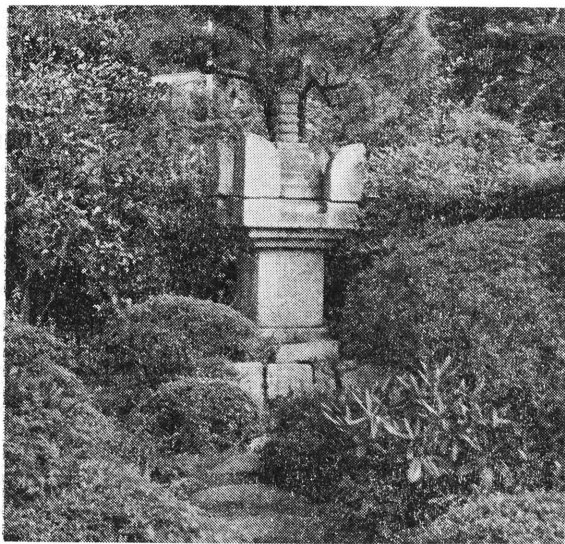
街道を平岡・広芝と過ぎて善妙寺の集落に入ると、新道の左に民家が並び、その裏から北にかけての丘麓

地を善妙寺跡と伝えている。昔を偲ぶ何ものもなく僅かに地名として残っているのみである。

さて、善妙寺は今を去る七百六十年余、西園寺入道大相国（公経）ならびに中納言中御門宗行卿の妻女によって造営された尼寺である。すなわち貞応二年（一二二三）承久の乱に敗れ関東方にとらえられ殺された中御門宗行の菩提をとむらうために、宗行の後室は明恵上人に帰依し剃髪して戒光と名を改め、善妙寺建立の本願主となった。そして西園寺公経によって古堂が移され、同年七月梶尾の本尊半丈六の釈迦像をこの寺の本尊として安置し、翌三年四月には唐本の十六羅漢像並に成忍筆の阿難尊者の画像を本堂に移してその開眼供養を行い、また尼寺の鎮守並に華嚴の守護として新羅国の女神という善妙明神を勧請し、また獅子狛犬等を安置したのである。こうして仏像などが安置され伽藍もととのえられ、明恵上人によってはじめて講經など仏事が行われたのである。そして建久後文覚上人から明恵上人に附授され高山寺の別院となった。

ところでこの寺は、本願主の「戒光尼」をはじめ多くの比丘尼達が住む尼寺であった。それは承久の乱に敗れた公家の未亡人らで、例えば山城守佐々木広綱の妻「明達尼」、彼女は夫及び父を乱で失い、一子勢多伽丸まで殺されるに至って、その菩提をとむらうため

明恵上人について出家し、父・夫・子のために写經、念仏に専念したが、遂に貞永元年（一二三二）清瀧川に身を投じ自らの命を絶ったといい、時に四十七歳であった。その他、藤原光親の妻「禅恵尼」、左衛門尉基清の妻「性明尼」、また「理証尼」「真覚尼」「明行尼」「信戒尼」など、ともに明恵上人によって出家して比丘尼となり、善妙寺で修行の生活を送ったのである。その間、有縁の人びとのために經典を書写し供養



阿 難 塔

したのであるが、これが「尼経」といわれ高山寺に現存している。尚、貞応二年の草創より約四十年を経た文永二年（一二六五）に「阿難塔」が造立されている。

その後の善妙寺については、徳川中期の記録にも存続していたことを伝えている。即ち、寺は善妙寺村の民家の西にあり、仏殿は東向き、阿難塔は仏殿の北、東向きにあり、善妙神社は石塔の北、東向きにあると述べているところから、善妙寺が創建当時のままではないにしても、その寺域に存在していたことは明らかである。

さらに正法律を唱えた慈雲尊者（一七一八—一八〇四）の弟子（尼僧）達が丁度この頃善妙寺に住していたようで、慈雲尊者及び弟子の伝記によれば、安永二年（一七七三）十二月十一日に寂した葉山義文尼、文化五年（一八〇八）七月十九日に寂した実堂義充尼、また文化十年（一八一三）正月二十七日に寂した峰山義圭尼などがそれで、これらの比丘尼達はそれぞれ善妙寺住職としてその一代となっている。また伝記によれば善妙寺と同様、正法律の尼僧の住んだ寺として梅ヶ畑即覚庵という寺が記されている。この寺が梅ヶ畑のどこにあったかは明らかではない。善妙寺、即覚庵では、慈雲尊者が千衣の袈裟裁製を発願されていたところから、弟子の尼僧達は袈裟を縫っていたことが伝

記の上から知られるのである。以上のことから少くとも江戸中期を少し下った頃まで善妙寺は存在していたことを知るのである。

しかしそれ以後の変遷は明らかでなく、何時しか廃絶してしまったのである。そして今日わずかに「阿難塔」そして「善妙神神祠」によって昔をしのぶのみである。

なお「阿難塔」は現在同地の為因寺の境内にあり、高さ約二メートルの宝篋印塔である。基礎の一部が欠け、相輪も破損しているがほぼ完存に近く、笠四隅の突起が別石の長大なもので、外側の線が直立した古い型を伝えている。塔身の正面に「阿難塔」裏に「文永二年乙丑八月建立」と刻まれており、記銘をもつ宝篋印塔の中で最も古い様式を示している。既述したように善妙寺は承久の乱の犠牲となった公卿の未亡人による尼寺であるが、この塔は尼僧達が阿難を供養して建立したものである。すなわち阿難尊者が初めて女人を出家せしめ、比丘尼の教団の成立の基をなしたという故事から、尼寺には多く阿難塔がたてられ、善妙寺に於ても尼寺なるが故に阿難塔がたてられたのである。この塔も善妙寺の荒廃により、何時の頃か為因寺に移り、七百年後の今日にその形を残しているのである。

（なりた しゅんじ 文学部教授）